

# 浄土教関係疑經典の考察

柴 田 泰

漢訳經典の中でも、浄土思想に言及する經典の非常に多いことは古くから知られていたが、近年藤田宏達博士がそれらを梵藏本と校合して、新たに「一覽表」として指摘された。しかしながら、藤田博士の研究は原始浄土思想関係資料としての經典故に、印度撰述の疑わしいものは嚴密に除外されている。ところがそれら除外された經典は中国・日本浄土教の研究には欠かせない資料である。一方、疑經研究の分野では、望日信亨・矢吹慶輝、そして近年牧田諦亮博士が主に敦煌本を中心に研究され、そうした中で弥陀信仰の疑經が多いことも指摘されている。しかしながら、それらの浄土教関係疑經典を総合的に取上げた研究は未だ認められないようである。本稿の意図は、こうした二つの分野に認められる浄土教関係疑經典を検索し、成立年代・思想形態・流伝などの問題を考えたものであるが、一々の經典について取上げるゆとりはないので、こゝではその概要を指摘するにとどめたい。そこで先ず本稿で用いる浄土教関係疑經典という言葉の持つ意

味について、一言触れておく。この言葉は初めに指摘した二つの研究分野に渉る用語であるが、従来漢訳浄土經典の概念は阿弥陀仏・極樂に言及する經典と考えられ、また疑經典の概念は中国撰述・真偽未詳を含めた印度撰述の疑わしい經典と考えられている。本稿でももとよりこうした阿弥陀仏・極樂に言及する印度撰述の疑わしい經典という意味が中心であるが、しかし資料の検索からそれ以外の、従つて阿弥陀仏・極樂に言及する真經、或いは阿弥陀仏・極樂に言及しない經典も広い意味で含まれることを注意しておく。その理由は以下で指摘する。

そこで、その概要であるが、現在検索した限りでは總數八〇余部の經典が考えられる。これは藤田博士「一覽表」二六六部に比べても約三割に相当し、中国・日本浄土教を考える上でも無視出来ない數である。

それらを經典の持つ性格から分類すると、真經と疑經に別けられる。こゝで真經というのは、經典自体は印度撰述に誤

りは無いかれどその中の阿弥陀仏・極樂の記述が原語から考えて異なつてゐる、或いは疑わしい、従つて中国以降浄土思想と考えられ、解釈された經典である。前に疑經典の概念について、本稿では真經であつても思想的に浄土思想で無い經典を含めたのはこの理由による。その二、三の例を挙げる

諸教所レ讚多在<sub>①</sub>三弥陀<sub>②</sub>故以<sub>③</sub>西方<sub>④</sub>而為<sub>⑤</sub>一準<sub>⑥</sub>と考えられ、『樂邦文類』などは浄土經典として取上げてゐる。以上の三例は、印度においては浄土思想で無かつた、従つて正しく言へば疑浄土思想關係經典と名づけられるものであるが、中国・日本浄土教徒にとつては浄土思想と解釈され、その流伝受容を考えるならば重要な經典と思われる。

と、第一は明らかに原語の異なる經典である。宋法天訳『大乘聖無量寿決定光明王如来陀羅尼經』は無量寿如来の名号受持、この經典の書写読誦を勧める内容であるが、無量寿如来の原語は Aparimitāyus であり、Amītyus ではない。本經の陀羅尼は他にも記述され、『説林』、矢吹博士「經論表」で浄土思想と見做されたものである。第二はその原語が梵藏本の無い為確定出来ないが、恐らく違うであろう無量寿・無量光・阿耨唎多・阿波唎密多などの記述が見られる經典(例えば『菩薩道樹經』『最勝頂陀羅尼淨除業障呪經』『金剛頂經瑜伽觀自在王如来修行法』など)である。それらは詠語の類似から浄土思想と考えられた經典である。第三は阿弥陀仏・極樂の記述が無くても後に浄土教所依の經典と見做されたものがある。『文殊説般若經』の一行三昧の思想は天台・初期禪宗において大きな比重を占めてゐることは有名であるが、浄土教典籍でも「専称名字」の思想は阿弥陀仏への念仏と解釈されて重要な經典とされてゐる。この記述は無量諸仏の中の一仏であつたが、堪然が解釈した如く「經雖<sub>①</sub>不<sub>②</sub>局令<sub>③</sub>向<sub>④</sub>西方<sub>⑤</sub>……、

それでは、所謂従来の疑經典の概念に相当する浄土教關係經典であるが、それらは第一に現存疑經典、第二に古佚經、第三に經錄による疑經典、第四に浄土經典と見做された疑經典に別けられる。就中、第一、二の經典は正しく本題に値する經典であり、それ故、成立・思想・流伝についての要点を述べよう。現時点の抽出では現存疑經四九部、古佚經九部、計五八部が考えられる。その成立年代に関しては經錄などにより推定可能な經典の中で三四部は隋唐代と考えられ、特に『法經錄』『武周錄』初出の經典が一八部と約半数、更に『安樂集』所引の古佚經を考え合わせると、浄土教關係疑經典の成立と流行は隋から初唐になる。次に思想内容については阿弥陀仏への念仏、讚嘆、觀仏、礼仏、憶念、或いは写經などによる極樂往生が強調され、その中でも全体的に多いのが念仏である。しかしこれらの記述は真經においても認められるのである、特に疑經故の特徴を考えれば次の点が指摘される。その一つは『無量寿經』『觀經』『阿弥陀經』の影響を明らかに受けて

いる点である。例えば『大通方広経』には『無量寿経』の過去  
仏・十二光仏・十三仏国土の仏名が同一漢字で順序通り列挙  
されているし、「善王皇帝経」「惟務三昧経」の『阿弥陀経』の  
影響、『無量寿如来至真等正覚経』『九品往生陀羅尼経』の『無  
量寿経』『観経』の影響などはすでに知られている。第二は二  
仏併信の傾向が認められる点である。阿弥陀仏と弥勒仏・地  
蔵菩薩などとの併信はすでに矢吹博士が指摘されているが、  
中でも『地藏菩薩経』の「造地藏菩薩像、写地藏菩薩経、念  
地藏菩薩名、此人定得往生西方極樂世界」という思想は『地  
蔵十輪経』『地藏本願経』には浄土思想が認められないから  
疑経ゆえの特徴と云えよう。次にその流伝受容であるが、中  
国から敦煌と日本へ『随願往生経』『浄度三昧経』など、敦煌  
だけへ『太子讚』『新菩薩経』など、日本だけへ、或いは日本  
偽撰（念仏超脱輪廻捷徑経』『阿弥陀三昧海経』など）に別けら  
れるが、中でも『十往生経』『山海慧経』の二部は一方は広  
本、他方は略本として敦煌・日本へと分かれ、多くの浄土教  
徒に依用された經典であり、また無量寿国の易往易取を説い  
た「目連所問経」の遺文は『安樂集』『阿弥陀経疏（窺基？）』『  
『樂邦文類』『往生要集』『説林』、或いは多くの日本浄土教典  
籍に引用された經典である。こうした流布の検討は中国・日  
本浄土教の思想的変遷を考える大きな手がかりになる。第三  
の経録で推定される疑經典では『武周録』の「舍利弗生西方

齋経」、『長西録』の「四十八願阿弥陀経」などが経名から考え  
られる。第四に真経の場合と同様に阿弥陀仏・極樂の言葉は  
無いけれども浄土經典と見做された經典が挙げられる。地藏  
經典として有名な『占察経』の「若人欲生他方現在淨国」  
者、应当随彼世界仏之名字専意誦念一心不乱、如上觀察  
者、決定得生彼淨国」の記述は阿弥陀仏への念仏と解  
釈され、浄土教典籍に引用されている。

以上、浄土教関係疑經典の概要を述べたが、結論として次  
の諸点に要約出来よう。第一は、浄土教の基礎的資料となる  
浄土教関係經典というのは、(一)、従来指摘されている真経、  
(二)、印度では浄土思想を予想したものでは無かつたが、中国  
以降に浄土思想と解釈された經典、(三)、印度撰述の疑わしい  
經典である。そして本稿で問題にしたのは(二)、(三)の經典であ  
る。第二は、浄土教徒の依用の点を考えるならば、阿弥陀  
仏・極樂に言及する經典以外に念仏三昧、他方往生に言及す  
る經典も考慮しなければならない。それらは今日では傍依の  
經典とされるが、かつての浄土教徒にとつては浄土往生の為  
の經典と解釈されたのである。第三に、嚴密な意味での浄土  
教関係疑經典については、隋から初唐にかけて成立、流行が  
顕著であること。思想的には、全体的に念仏が強調され、所  
謂「浄土三部経」の影響、二仏併信が認められること。それ  
らは中国、そして敦煌、日本へと多くの影響を与えているこ

などが跡づけられる。尚、真經との思想関係、敦煌本の整理、真經の中の偽撰的要素、中国願生者の受容など残された問題は多いが、本稿はその最初の段階として予想される疑經典の概要を指摘した次第である。一々の經典の考証については別に発表する予定である。

1 藤田宏達『原始浄土思想の研究』一三六—一六四頁。

2 本稿で用いた資料並びに従来の諸研究について略述すると、

漢訳浄土經典の分野では代表的ものとして『楽邦文類』『往生要集』『阿弥陀仏説林』、矢吹慶輝『阿弥陀仏の研究』附録『漢訳浄土經論表』、藤田博士「一覽表」、更に中国・日本

浄土教典籍の引用經典。それらの中で特に疑經典という点では、『安樂集』所引の古佚經、『楽邦文類』卷一、『説林』卷七、藤田博士が矢吹博士「經論表」から浄土思想に非ずと除外された經典などが指摘される。疑經研究の分野では『経律異相』

『諸經要集』『法苑珠林』等所引の古佚經、それらを中心とした研究の望月信亨『仏教史の諸研究』『浄土教の起原及発達』『仏教經典成立史論』所収の關係論文、敦煌本を中心とした矢吹慶輝『鳴沙余韻解説』、そして最近では牧田諦亮「中国仏教

における疑經研究序説」(『東方学報』京都 三五)並びに個々の疑經に関する諸論文などが挙げられる。疑經目録について言えば、浄土經典関係では『長西録』『経籍録』の「偽妄録」、中国の經録では「道安録」から「貞元録」に至る疑經目録、更に

「奈良朝現在一切經疏目録」の検討が成立流伝を考える場合の参考になる。最後に現存する大正藏經、続藏經、煇本(但し、

敦煌本については、私の披見し得たスタイン本マイクロフィルムに限った。大正藏卷八五所収の原本並びにジャイルズの目録に依る疑經・不明疑經断片など)について、以上の資料・諸研究、そして新たに見出した經典を含めて取上げた。

3 本經の主仏を阿弥陀仏と見做したのは『説林』からであり、中国においてその様に解されたかどうかは、無量寿陀羅尼を説く密教經典は非常に多いけれども究め難い。敦煌本『大乘無量

寿宗要經』(S. 68, 109, 121, 177, 198 etc. 二百数十種)敦煌遺書総目索引(参照)には「当得往生西方極樂世界阿弥陀浄土」と浄土思想に言及している。尚、矢吹慶輝『鳴沙余韻解説』第二部「大乘無量寿宗要經に就いて」、石浜純太郎・芳村修基「無

量寿宗要經とその諸写本」(『西域文化研究』第一)参照。大正八・七三一上中。例えば『安樂集』卷下、『觀念法門』、『釈浄土群疑論』卷七、『万善同歸集』卷上、『楽邦文類』卷一、『西方合論』卷三など。

4 大正八・七三一上中。例えば『安樂集』卷下、『觀念法門』、『釈浄土群疑論』卷七、『万善同歸集』卷上、『楽邦文類』卷一、『西方合論』卷三など。

5 『止観輔行伝弘決』卷第二之一(大正四六・一八二下)。  
6 この系統に属する經典として『木槵子經』『大集経日藏分』『地藏十輪經』などが考えられている。但し、こうした經典の扱いは浄土教徒の引用經典の研究分野に入るのであり、意図的に浄土所依の經典を集めた資料(『釈浄土群疑論』卷七、『楽邦文類』卷一、『説林』卷七など)に限られる。

7 大正八五・一三四一—一三四二上。

8 望月信亨『仏教經典成立史論』三五二—三五四頁。牧田諦亮前掲論文、同「松誉殿的疑經觀」(『浄土教の思想と文化』所収)。なお、「無量寿如来至真等正覚」經は、所謂(浄土三部經)

の外に、『悲華經』（大正三・一七四下～一九二中）の本生説話、『阿彌陀經通贊疏』（大正三七・三四一下）の高声念仏十種功德を依用して構成された疑經典である。

9 矢吹慶輝「支那仏教史と現存疑經」(『宗教研究』昭和六年臨時特輯号)、『三階教之研究』六五七頁。

10 大正八五・一四五下。

11 佐藤成順、大南竜昇「十往生經の研究」(『三康文化研究所年報』三号)参照。

12 以上の検索で気づいた点について、一、二触れておきたい。

その一つは敦煌本についてであるが、私の調べ得たスタイン本の中( S. 22, 2037, = 2095, 2758 は大正蔵未収經である。またジャイルズが不明疑經断片とした一四部の中で四部に阿彌陀仏・極樂の記述が認められ、それにより S. 622 は『新菩薩經』(『敦煌遺書總目索引』は『勸善經』とする)、S. 1088, 4308, 4559 は『無量大慈教經』の断片である(大正蔵卷八五所収の原本 S. 1627 は首欠、S. 6861 により判明)。また古佚經二三〇余経(望月信亨『仏教史の諸研究』一三〇頁以下、『仏教經典成立史論』三一四頁以下参照)については、すでに知られている『安樂集』所引のものなどを除いて、新たに認められたのは「空行三昧經(?)」、「法苑珠林」卷一一「優填王作仏形像經」(『諸経要集』卷八、『法苑珠林』卷三三)などである。

大正一七・九〇八下～九〇九上。例えば『浄土論』卷下、『釈浄土群疑論』卷七、『阿彌陀經疏(窺基?)』、『同聞持記(戒度)』、『往生要集』卷下など。

### 執筆者紹介(六)

御 牧 克 己	(京都大学大学院)
沖 和 史	(京都大学大学院)
菱 田 邦 男	(愛知教育大学助教授)
早 島 理	(京都大学大学院)
中 谷 英 明	(京都大学大学院)
戸 田 宏 文	(徳島大学助教授)
針 貝 邦 生	(九州大学助手)
越 智 淳 仁	(高野山大学大学院)
松 長 有 慶	(高野山大学教授)
秋 山 達 子	(駒沢大学大学院)
溝 上 富 夫	(大阪外国語大学講師)
笠 井 貞	(群馬大学教授)
山 本 啓 量	(石川県農業短期大学教授)
山 口 恵 照	(大阪大学教授)
壬 生 台 舜	(大正大学教授)
玉 城 康 四 郎	(東京大学教授)